

“The Eternal Moment” のケース・スタディ： E.M. フォースターの Cosmopolitanism に関する考察

山 田 美穂子

〔キーワード〕 二十世紀初頭イギリス小説, ヨーロッパ, 旅行,
国家意識, E.M. フォースター

I 「旅行」をめぐる批評背景

十九世紀後半から二十世紀初頭のイギリスに勃興した ‘the Mediterranean Passion’——「地中海への情熱」——は質量ともに瞠目すべき社会現象であり、人文科学のあらゆるジャンルのうちにその表象が見いだされ、解説されてきた。近年著された研究書の中では、中産階級の旅行者を対象に膨大な資料採集の結果をまとめた John Pemble の『地中海への情熱——南欧のヴィクトリア＝エドワード朝の人々』(1987)と、「反・旅行 (Anti-Tourism)」という概念に注目しつつ社会制度化した「旅行」を再検討した James Buzard の『既成のルート——ヨーロッパ旅行, 文学, 〈文化〉への道, 1800–1918』(1993)の二冊が、十九世紀を起源とする現代人の観光旅行の諸相を網羅している。これらの議論が浮かび上がったもう一つの興味深いテーマは、イギリス人、特にその中産階級のインテリ層が抱いていた「国家観」である。ペンブル自身の結論によれば、ヴィクトリア朝のイギリス人は行き詰まった先進文明社会やキリスト教以後の思想的虚無による不安からの解放を求めた「現代のユリシーズ」であり、地中海世界は「それ自体としての生命を否定されて (….) イギリス人たちの切望や嫌悪や希望や不安のイメージに従って改造されることになった」(ペンブル, 344) という。一方ペンブルの著について寄せた文の中で富山太佳夫は、イギリス人インテリの憧れの地中海、ことにイタリアの都市が「祖国においてもつれあっている諸々のイデオロギーをくっきりとあぶり出す場になっ

ている」(「歩くこと、旅、そして旅行」, ペンブル, 380) ことを評価したうえで、ペンブルとバザードの両者とも(おそらく意識的にはあるが)奥地探検と極地探検に言及していないと指摘し、西欧の内部に限定された旅行の考察にとどまるかぎり「現代の旅行」の起源説としては不完全である、と述べている。そこで本稿ではその不完全さと限界を意識したうえで、この現代型ツーリズムを可能にした前提条件であるヨーロッパという空間を舞台に二十世紀初頭のイギリス人作家 E.M. フォスターが想定していた「国民国家」の意識を探り、とくに彼の初期作品に現れてくる当時の「コスモポリタン」——国際人たち——の表象について考察したい。

ヴィクトリア朝のイギリスの統治者はしばしば自らを古代ローマ帝国に擬し、その異文化管理能力を自負していた。当時、知識人はさかんにギボンの『ローマ帝国の盛衰』を愛読し、急進派議員ディルク卿は著書 *Greater Britain* (1868) において ‘the ascertained virtues and powers of the English people’ (Vol. 2, 403) (「あまねく知られたイギリス人の徳と力」) というスローガンを打ち出して読者の愛国心を鼓舞していた。「もしローマ人がケルト人をちゃんと支配下においていれば、絶対にこんなことにはならなかったろうに」(“The Propagation of Knowledge” in *Stalky and Co.*, 1926, 237) ——これはアイルランド独立に関するキプリングの憤りの表れとして、あるキプリング論の注に紹介されている登場人物のセリフである。その論者である長井香里によれば、「外部」と接触する「前線」あるいは「境界」は文化的雑種化の起こりやすい対等な遭遇の場であると考えられがちであるが、実は「西洋化等の影響を差し引いた本来的なタイプを同定しようとする試み」(『ラドヤード・キプリング』「引用と境界」, 2003 年, 314) すなわちステレオタイプが強化される場、支配者側の本質的で決定的な優位が絶えず確認される場である。異文化は「引用される」(長井, 315) が、決して同化・吸収はされない。この卓見を十九世紀ヨーロッパにおける観光産業の勃興に当てはめてみるなら、イギリス人が体験した異文化遭遇とその結果について興味深い疑問が湧いてくる —— 当時のイギ

リス人は、「旅行」を通じて cosmopolitan としての意識を高める結果となったのか、あるいはむしろ、自らの特殊性、すなわち「英国性 (Englishness)」を意識するようになったのか？ 当時の地中海ブームの前提条件であった「ヨーロッパ」という身の安全を保証された領土設定、これは明らかに古代ローマ帝国の理念の再現である。

旅行産業を可能にしたインフラストラクチャーの発展はこの二世紀間の国際平和によるもので、ハドリアヌス帝の壁からユーフラテス河まで敵国との国境をまたがずに旅することが出来る。都市生活者はこの恩恵を蒙って各地に旅行し、なまぬるい日常からの脱出と新鮮な感覚的喜びを得る。

上の引用はスペイン生まれのローマの哲人セネカによる当時の世界情勢の観察であるが (John Urry, *The Tourist Gaze*, 4), ここには現代の観光旅行の条件と状況にも通じる点が多く見られるのではないだろうか。翻って十九世紀ヨーロッパの状況を見ると、英・仏・独の三ヶ国語で編纂された *Cosmopolis: An International Monthly Review* の創刊 (1896) には、当時プロシャの台頭で緊張を帯びていたヨーロッパ内の勢力均衡と国際調和への関心の高さが認められる。これは十九世紀末ヨーロッパ文化の一つの見本となる国際的総合雑誌で、ロンドンをはじめパリ・ベルリン・ウィーン・ニューヨーク・サンクトペテルブルクなど主要都市で同時刊行された。三ヶ国語の記事を均等に並べるというタイトルどおりの「世界市民主義」的な企画が特徴的であり、異文化交流の努力の発露ともいえる雑誌である。寄稿者には先に引用したディルク卿や、メレディス、ステイーヴンソン、キプリングら大英帝国の文壇の主流派から、社会主義的な作品で資本主義・帝国主義の弊害を糾弾していたギッシングまで、有名無名の知識人が混在している。ただし国際協調という大義名分は商業的な成功には結びつかなかったらしく、この『コスモポリス』誌の刊行は1898年に終了している。冒頭に引用したペンブルも、国際協調の道具としての旅行に関しては悲観的である。ヴィクトリア朝とエドワード朝の旅行者たちは総じて語学的に多才でなく、文化的な許容度も高いとはいえない社会層であったため、

輸送手段の大変革も国際交流には役立たなかったと述べ、「もしもイギリス人が自宅にとどまり、庭の手入れをしていたとしても、国際的な厚情や理解のレベルは減じることなく、強められさえしていたであろう」とコメントしている(344)。

これらの現象や証言から、「孤島」というヨーロッパにおいては特異な「国のかたち」をもつイギリスは、一つの帝国(植民地世界)の中心でありながら同時に、もう一つの帝国(ギリシャ・ローマ文明圏)の辺境でもあるという、複雑な national identity を構築していたことがうかがえる。そして、その国民の経済的な余暇が生み出した活動としての「旅行」が、それまでの個人主義・自己中心主義を培ったロマン派的な the 'solitary' gaze に対して the 'collective' gaze というものを出現させたとすれば(Urry, 43-44)、その集団的視線が交差する現場すなわち「リゾート」での出来事を丁寧に読むことによって、その視線の持主の価値観や欲望——人々は代金を払ってまで何を見たいと考えたのか——が明確になるだろう。18世紀半ばから始まった余暇と消費者中心経済の符合を巡る歴史的考察、*The Delicious History of The Holiday* (2000) においてフレッド・イングリスが指摘するように、holiday/tour/vacation を検討することは、その社会を織り上げている価値観や思想や情熱といったソフト面と、その社会の地理や歴史といったハード面の一見雑多な情報と資料をいま一度組み立て、当時の旅行者がいかにか 'the quest for a self-aware self-fulfilment' (2) を遂行したかを知ることである。それは言い換えるなら、'the contrivance of identity' を目的とした旅行である。かつて「どれが美しい風景か」の判断基準をピクチャレスク絵画に求めたイギリス人は、十九世紀後半になって「何を見たいと欲し、何を感じるべきか」の手本を西欧古典文明の象徴であるイタリア・ギリシャに求めるに至った。それは自国の特異な優位性であると信じてきたものが Englishness という名前で相対化されてしまった時代に、国民レベルでのアイデンティティ探求が「旅行」という表象となって表れた結果であったと考えると、旅行に関する記述はフィクション・ドキュメンタリーといった形式を問わず、一層興味深いものとなる。

上に述べてきたように、現代の「旅行」と national identity との関わりが十九世紀末から二十世紀初頭のフィクションや紀行文に現れる文化的表象の解釈を通じて見えてくる。そこでその一つのケース・スタディとして、異文化遭遇にいわば失敗した人間群像劇を得意の題材とし、その功罪が近年ますます取りざたされている E.M. Forster の比較的よく知られている中篇小説「永遠の瞬間」(“The Eternal Moment”, 1947) を取りあげたい。なお作品の解釈にあたって参考にしたフランコ・モレッティの *Atlas of The European Novel 1800-1900* (1998) に紹介されている解説法はきわめて興味深い。モレッティは十九世紀のヨーロッパ文学においては筋立てと舞台設定(国, 都市, 地方, 国境地帯, 海岸など)とは不可分な関係にあり, “Space is not the “outside” of narrative, then, but an internal force, that shapes it from within. ... in modern European novels, what happens depends a lot on where it happens” —「されば空間とは物語の外部ではなく, それを形作る内なる力である……近代ヨーロッパの小説においては, 何が起きるかは, それがどこで起きるかに大きく依拠している」(70) と規定している(強調は筆者による)。具体的には作品中で言及される地名に注意を払い, 小説の舞台・登場人物たちのアクションと移動・構成人物の国籍などの情報を実際の地図上に重ねてみることで, そのフィクションの意図や構造, 効果などの諸相を視覚的に把握するものである。これは抽象的になりがちな national identity を具体化する一助として, フィクション中の「旅行」を考察する際には有効な方法論である。

II E.M. フォースターの時代の「イタリア」

十九世紀のイギリス文学においては, まずは知的・道徳的「解放」の地として表象されたイタリアであるが, 当時のイタリアは諸王国に分裂し聖俗双方の権力者からの圧政に疲弊しており, 1861 年の国家統一を焦点とした解放運動「リソルジメント」(Risorgimento) に揺れた混乱の現場であった。その近代国家への変貌を芸術家が歓迎したか否かは疑問であり, 事実ヘンリー・ジェームズは統一後のイタリア訪問で「イタリアに舞い戻ってきて最初のときより強

く痛感したのは、偉大な芸術的な時代の豊饒さと、同一の場所における現代の才能の俗悪さとの落差だった」(『郷愁のイタリア』, 152-53) と感じている。舞台の選択は作家により様々であった。ジョージ・エリオットのローマ、ヘンリー・ジェームズのヴェネツィア、そしてフォースターはフィレンツェやサン・ジミニャーノ(シエナ近郊の中世都市; 作中では架空の町「モンテリアーノ」) といった北イタリアのルネッサンス文化豊かな都市を長編小説の舞台に選んでいる。地理的・歴史的条件下、一般にイタリア北部は比較的近代化・工業化が進み、南部は農業・漁業を中心とする前近代的な共同体社会を温存することになったと考えられている。従って、どの「イタリア」を観察の対象に選ぶかという選択によって、各作家の national identity への態度が伺える。しかし、近年問題視されている globalism 対 localism のせめぎ合いとよく似た奇妙な現象が、フォースターの *A Room with a View* (1908) にすでに見出される。すなわち、主人公 Lucy にとってフィレンツェはロンドンと置換可能な場所と感じられる、という観察である。ここではあまりにも観光産業のインフラが整った結果、自分の既知の領分を出ないままガイドブック的な観光名所・名物だけを享受する「物神崇拜」、いわば「フェティッシュとしての異文化からの引用」(長井, 315) がなされている。この小説においてはフィレンツェという都市は、単に中産階級の深窓の令嬢ルーシーの成長物語の背景であって、その舞台としての地理的・歴史的必然性は感じられない。

しかし、フォースターの「異国」描写はさほど単純ではない。事実、1904年に書かれた短編「永遠の瞬間」において、フォースターは早くも後の「異文化の衝突」という構想のプロトタイプともいえる物語を示しており、「旅行」産業の持つ影響力(しばしば破壊力)を考察している。この物語の場合、舞台は架空の村 Vorta, すなわち現代ではウィンタースポーツが盛んなリゾート地として知られるドロミテ山塊中の Cortina d'Ampezzo であるが、この物語の舞台には「ここでなければ起こらない」という必然性がある。たとえば、伝記によればフォースターは1901年から一年間母親とイタリア・ギリシャ旅行をしており、ここコルティナにも滞在している。この作品が自分の滞在体験を下

敷きとしていることは1928年刊行の短編集のイントロダクションに明らかにされており、作家自身の思想的告白をある程度読み取ることが出来ると考えても妥当であろう。また、フィレンツェという都市に一種のビルドゥングスロマンである『眺めのいい部屋』の背景という役割が色濃いのに対して、『永遠の瞬間』のテーマはこの観光化した村ヴォルタの命運そのものと深く関わっている。そのテーマとは、民主主義や資本主義というきわめて「人道にかなった」（と当時考えられていた）思考と社会の枠組みが「悪」を産み出したとき、人間の知力や道徳でそれを正せるかという、後期のフォースターが随筆や政治的パンフレットで繰り返し問うた問いである。英語の堪能なイタリア人のコンジェルジュは、資本主義という巨大な帝国と祖国との境界で他人の言語をもちいて奮闘する境界的存在、という重要な役割を与えられており、彼等ホテルの使用人の話す言葉だけが‘cosmopolitan English’と表現されるのは示唆的である。その一方でフォースターは、この作品は‘almost an honest-to-God yarn’（イントロダクション、6）であるとも述べている。ヴァージニア・ウルフがフォースターの性質について、「double-visionの持ち主であり、普段はその視点が統合されないために読者にとっては難解に感じられる」と評したように、フォースターの作品中の要素にはリアリズムに見えて実は予言者の、といったような矛盾した性質があり、この作品にしても単純な二項対立、すなわちcosmopolitanismとEnglishnessを用いた単純な見取り図が描けるとは限らない。

この作品の舞台のモデルであるコルティナ・ダンペッツォという土地は、その地理的・歴史的な性格から必然的に政治の力学の働く場となる運命であった。長らくsublimeな秘境であったドロミテ山塊に最初に興味をもったのは、ナポレオン帝政時代のフランス人である。続いて様々な国籍の旅行客が訪れた——イギリス人、フランス人、アメリカ人、ドイツ人、そしてスイス人である。フォースターは繰り返しVortaがbilingualな村であることに言及し、詳細な使用言語に関する情報を細やかに積み重ねて当時の国際的なリゾート地の雰囲気

気を活写している。しかし、この土地の特殊性をもっともはっきりと示すのは、‘the Teuton was gaining on the Latin in *this debatable valley*’ (204) ——「ゲルマン民族がこの係争地の谷間において（ラテン民族との戦いに）勝を収めつつある」という一文であろう（強調は論者による）。「この係争地の谷間」という奇妙な呼び名は、この南チロル地方の13世紀以来繰り返しドイツとオーストリアの間で領土割譲の対象となってきた波乱万丈の歴史に由来している。この物語に登場した時点では、ヴォルタすなわちコルティナ・ダンペッツォはオーストリア領であると考えられる。1814年に開催されたウィーン会議でハプスブルク家に割譲されたこの地方は、1861年に統一イタリア王国が成立した折にも異動はなく、第一次世界大戦後1919年のパリ講和会議の結果、同盟側であったオーストリアから連合国側のイタリアに譲渡された。1882年と1891年の二度にわたり独・奥・伊三国同盟が更新されているが、この同盟内での強者は帝国主義を唱え、英仏と衝突を重ねたウィルヘルム二世を戴くドイツ帝国であったことは疑いない。フォースターがこの地を訪れた二十世紀への変わり目には、先に引用したように「ゲルマン人」すなわち北からやってきたドイツ人がラテン文化圏を席捲していた。つまり語り手の言うとおりで、「彼らは Ach と Ja の国に来ていた」（『短編選集』, 91）のである。

III 『永遠の瞬間』に現れる「国」の表象

あるイギリス人女性作家が小説の舞台のモデルにした寒村が一躍観光名所になるが、そこを再訪する彼女の胸に失望と諦観が去来する、というプロットをもつこの作品は、旅行者がある場所をテキストとして読み、また書き込みをするという行為にまつわる因果応報についての一種の寓話である。それはまるで、ドロミテに滞在した若い日のフォースターが抱いた奇妙な予知夢のようでもある。作家自身の言葉によれば、「永遠の瞬間」の主題は ‘triumph magnificent, cold, hardly human’ (Forster, 1928, 221) である。この「[現世に対する] 人智を超えたもの＝非人間的なものの勝利」というテーマといい、イタリアを旅行中の中年の独身女性（職業は作家）、二流の宿屋、まずい夕食、失敗

に終わるピクニック、現地の青年の誘惑、子どもと金銭の交換など、フォースター作品にはお馴染みのモチーフがこの作家のキャリアの早い段階ですでに出揃っていることは注意をひく。あらすじは比較的単純で、主人公の Miss Raby は自分の出世作となった小説『永遠の瞬間』の舞台のモデルであるイタリア・アルプスの村 Vorta を長い躊躇ののち再訪するが、(語り手によればメーテルリンクの『青い鳥』とも比すべき) 彼女の秘密のユートピアであったその土地は、皮肉にもその名声によって引き起こされた観光化のためにすっかり墮落している。レイビー女史は自分が引き起こしたこの「墮落」を償おうと決心、昔自分に言い寄ったイタリア人コンシェルジュに彼の子どもを買い取って教育し、「経済的な余裕こそ文明の源泉である」ことを教えたいと申し出るが、コンシェルジュは昔の悪戯を種に恐喝されたと思い込みパニックに陥る。この騒動でレイビー女史は旅の同伴者であったイギリス退役軍人 Colonel Leyland の愛情を失う結果となる。以下は、具体的にどのように national identity が作品中で言及されているかを検討するケース・スタディである。

レイビー女史は作家という職業柄やはりラテン系民族びいきであるが、イギリスの退役軍人である(負傷による早期退職なので、まだ心身ともに壮健な)レイランド大佐は「軍人だから、ゲルマン民族を尊敬していた」(91)。大佐がこれからはドイツ語の時代だと主張し、ドイツ言語ひいてはドイツ思想の優位を匂わせる——「およそ、あらゆる事柄に関し、重要な書物はドイツ語で書かれています」。一方レイビー女史は、イタリア語ひいてはイタリア文明のもつ普遍性を指摘する——「でも重要な事柄に関する書物はすべてイタリア語で書かれています」(91)。規律・効率を求めるアングロサクソン民族と、怠惰だが人間性を熟知するラテン民族、というステレオタイプが極端に示され、当時のイギリス知識人層の観念が二分されていたことがうかがわれる。

作品中では、実際にはドイツ人のほうが批判的に描かれている。ホテルに着いたレイビー女史が夕食をとりに食堂に向かうが、食堂は「イギリス人やアメリカ人、金持ちだが、がつがつしたドイツ人で満員」である。また別の例で

は、ドイツ人のウェイトレスが屋外テーブルについたレイビー女史に対して慇懃無礼な口調で、ここは下層の者の座る場所なので中の客間へ入るようにと勧める。その階級差別をやんわりと揶揄するレイビー女史を軽くいなし、ウェイトレスは客間へ戻ってゆくが、「そこには立派な食事と常識を備えた人たちが大勢いた」(115)。この「常識を備えた大勢の人たち」とはもちろん当時優勢であった「ゲルマン人」であることが、フォースター独特の目配せで読者に伝えられる。

次に批判の対象となるのはアメリカ人の旅行者である。あるアメリカ人の男性客は、自分の不眠症を口実にホテルのオーナーに圧力をかけ、地元の教会の朝の鐘の音と農民たちの夜のうかれ騒ぎを止めさせる。その自己中心的な振る舞いに激怒し抗議したレイビー女史は観光客のなかでは変人扱いされ、彼女は宿のなかで孤立することになる。「イギリス人とアメリカ人が『協力』すればできないことはない」というのがそのアメリカ人の信条で、それを宿泊地の農民にも実行したのである(113)。これは当時台頭してきた新興勢力アメリカの戯画であろう。フォースターがイタリアを旅行していた頃のアメリカの大統領マッキンリーは、帝国主義を掲げスペインと開戦した強硬派であり、彼の「門戸開放宣言」は軍事的経済的に先制したヨーロッパ列強のやりくちに習うという宣言であった。その後のアメリカの領土拡大と資本独占はいわばかつての大英帝国の映し鏡であり、イギリス人フォースターはそれに対し容赦のない態度を示している。例のアメリカ人と喧嘩別れした後のレイビー女史のナレーションを借りて、たとえ昔ながらの粗野で素朴な宗教（この場合、イタリアのカトリック信仰、止められた鐘の音、農民の歌を指す）が無力になったとしても、「それに代わり得るものがアメリカで生まれるということは、ありそうに思われなかった」と語っている。

宗教的な覇権争いがこの「係争地の谷間」における一つの重要な焦点であることは、教会の種類への言及が多いことから読み取ることができる。イギリス人の旅行者が批判されているのは、この宗教がらみの側面においてである。巻頭早々、馬車でヴォルタに近づいたレイビー女史が最初に気付くのは崖にせ

り出した教会の鐘楼である。それが女史の小説の名声によってもたらされた富の結実であることをガイドの説明で知り、彼女は嬉しさを覚える。興味深いのは、その新しい鐘楼はヴェニス風の造りだが肝心の鐘の鑄造場所が不明——なぜなら「音色には国籍がないので、鐘の出所は決めかねた」(97)のだ、という語り手のことばである。フォースターが作品中に「音」を使うときには必ず象徴的意味を帯びているが、ここでも鐘の音は「無国籍」というフォースターが憧れた芸術のありかたを示唆している。

さて、この鐘に呼応して村にある他の数々の教会、「小さな教会、不恰好な教会、かぼちゃみたいな塔のついたピンク色をした教会、板張り屋根の尖塔のある白塗りの教会、森の空地や牧場の起伏にほとんど隠れて見えない教会」(98)の鐘も鳴り渡る、という教会の列挙が続くが、この多彩な教会群は当時コルティナ・ダンベッツォに訪れていた旅行客の国籍と対応している。このなかで初期イギリス様式により建てられた国教会派の教会だけが「つつましく沈黙を守っていた」というのが暗示的であるが、これが後で出てくる、些細な、しかし当時のイギリス人が海外へもって出た宗教的雰囲気をよく捉えた描写への伏線となっている。それは、イギリス人の善良そうな老婦人が『モーニング・ポスト』紙をばりばりいわせながら」(116)レイビー女史にイギリス国教会の基金募集の献金を頼む、という、この作品においては数少ないコミカルなシーンである。老婦人は「わたくし共が集会所をもつということは、大事なことでございますからね？」と嬉しげであるが、レイビー女史は「まったくその通りですわ……でも、そういう場所なら、英国にあってほしいものですわ」と煙に巻く。この場面で老婦人が象徴しているのは、『モーニング・ポスト』紙の主要な読者であったイギリスの退役軍人、レイランド大佐に代表されるプライドが高く、実利的な考えの持主の集団の存在である。彼らの宗教心が実はそう強くもなさそうなのは、先の国教会が「沈黙」していたことから推測できる。資金の集まりはあまり良くなく、おそらく「鐘」はまだ奉納できていない。それゆえの「つつましい沈黙」であったのである。

IV cosmopolitan への憧憬のゆくえ

周囲の状況にかまわず真情を吐露する癖のあるレイビー女史の「愚かさ」のエピソードが、それでも共感と寛容をもって描かれているのに対して、典型的イギリス軍人であるレイランド大佐に関するフォースターの態度は非常に厳しい。功成名を遂げた裕福なレイビー女史が老後の自分の似合いの妻になると算段していた大佐は、終幕で出来た彼女とコンシェルジュとの不道德な関係（という妄想）にすっかり失望させられ、無言で退場する彼女に儀礼的にさえ声もかけない。その時レイビー女史に訪れた天啓（エピファニー）は次のようなものである。「いま目の前にいるのは、立派な家柄、十分な教育その他、ありとあらゆる特権を持ち、洞察力と教養と人間に対する知識をふんだんに身につけていると勝手に思い込んでいる男なのだ」（144）。彼はその傲慢な態度のうちに、コンシェルジュのフェオ、なんの特権もなく貧しく、「金持ち連中に仕えているうちに男らしさや純朴を失ってしまった男」と精神の水準が同程度であることを暴露したのである。この「田舎者」と「都会育ち」の二人の男たちは狭量な世界観、想像力の欠如という点においては意外なほど似た者同士であった、という命題がフォースターの創作の原点の一つになってゆく過程を、本作品は見事に捉えている。

文化の境界を越える人、すなわち「国際人」（cosmopolitan）を自認するレイランド大佐はフランス語も話すが、そのことは以外にも、上に述べた二人の「類似」を一層印象づける効果をあげる。終章近く、レイビー女史とかつての誘惑者であるイタリア人コンシェルジュとのスキャンダル騒動のさなか、彼はフランス語でレイビー女史を叱責するが、それがコンシェルジュにも理解されることに気が付き狼狽する。この係争の相手であるイタリア人もまた、「国際人」なのだ。一体読者が、レイランド大佐の憤りは「他人の前で恥をかい」といった一時的な反応よりも根深いものであるように感じる理由は何であろうか。語り手のコメントによれば、レイビー女史は自分よりも階級の低い人間の前で、支配階級である彼女自身の感情や欲望をむき出しにしたことによって、

彼女と同じ階級・グループに属するレイランド大佐や彼の親族、周りの旅行者などの権威までも失墜させたのだ、という。「異邦人の前に、赤裸々な彼ら[支配者]の姿を暴露」(146)するという、大英帝国の一員であれば最も重罪にあたる罪を犯したことになるのである。そうであれば、架空の村ヴォルタはすでに「観光」という名前の国家事業の最前線の表象であり、旅行者はその一人一人が政治経済活動のエージェントである。彼らは本国で規定された規範を外したとき、初めてレイビー女史のように‘cold, hardly human’な精神的勝利を味わうことができるが、その代償として現世での居場所は否定されるのである。

レイビー女史に象徴される当時のイギリスの知識人は、係争の地において「コスモポリタン」であれば、相手を理解し「同情したり愛したりすることもでき」(141)、如才なく調和を創ることが可能であると考えていたことがフォースターの作品や随筆の端々から伺える。たとえばその典型的な人物造形と思想は、フォースターの代表作 *Howards End* (1910) における博愛主義的な婦人会のディバートにも見出すことが出来る。しかし、資本主義競争を勝ち抜き生き残るために複数の national identity をまとうことが必要条件であるフェオのような存在と、経済的余剰の恩恵で「国際人」の教養を身につけたレイビー女史のような存在とは表裏一体の関係にある。作品中のモチーフをアレゴリーとして借りるなら、彼らは成就しない「いいなづけ」——『イ・プロメッシ・スポジ』(89)——同士である。この作品において繰り返し狭量な愛国主義を海外へ携帯してゆく旅行者のステレオタイプが描写される意味は、ペンプルの悲観的なコメントにもあったように、「国際人であること」は決して係争の時代のヨーロッパを結びつける万能薬ではなかったという事実を強調する点にあったと考えられる。

ヴィクトリア朝末期からエドワード朝のイギリス人の心情として、レイランド大佐の言う「あなたを理解せず、あなたにもまた理解できない、そんな人たち」(106)に遭遇するときの不安と不快は常にあった。この不安と不快が、や

がて「ジンゴイズム」と呼ばれる好戦的な愛国主義や、一見より穏健な伝統回帰愛好者へと枝分かれし、文学上の関心も次第に内向してゆく。例えば「軍人」キプリングは自分の後半生を「田園に隠遁する児童文学作家」としてプロデュースし、南イタリアのレモン畑で農民と対話するのを好んでいた D.H. ロレンスはやがて『イングランド、わがイングランド』(England, My England, 1915)において、アンティークな椅子や建物の修繕・修復を好む保守的なイギリス人青年を造形する。「教養」自体の価値と力を信じていたヴィクトリア朝の「最後のグループ」に属したフォースターでさえも、その教養が近代の旅行についてまわる「国民国家」に対する自意識 (national identity) の不安と不快を凌駕できないことを予感していたのであろうか。その問題について考察を続けたフォースターはその後インドまで赴き、アングロサクソンとラテンとの二項対立世界とはまったく別の枠組みの世界にたどり着いたが、そこでも教養や善意の無力、という現代の危機への解決の糸口は見出されなかったのである。フォースターが『インドへの道』(A Passage to India) を著した 1924 年、ヴァージニア・ウルフは「イギリス文学の一つの偉大な時代を目前にして戦慄を覚える」と述べた。そして 1920 年代のイギリス文学にモダニズムが到来しイギリス文学が美術や音楽のジャンルと同様「国際化」したとき、パウンド、イエーツ、ジョイスといった多くの「亡命者」が重要な役割を果たしたことは偶然ではなかったという (クラーク, 159)。だがフォースター自身は、『インドへの道』をもって小説創作に終止符を打っている。そこに至る彼の創作の痕跡をたどることは、「国際人」とも「根なし草」とも解釈が可能な両義的なこの存在——コスモポリタン——に対してフォースターが抱いていた懐疑の変遷をたどることに等しい。そしてこの中篇「永遠の瞬間」には、同時代のイギリス人の観光旅行熱の批判的観察に始まり、やがて「国際人」あるいは「国際化」に対する懐疑へと展開してゆくフォースターの国民国家観の原型を読みとることができる。

第一次資料：

- Forster E.M. “The Eternal Moment”, *The Collected Short Stories*, Sidgwick & Jackson, 1947; reprinted in Penguin Classics, London: 2002.
- . *A Room with a View*. Edward Arnold, 1908; Penguin Classics, 2000.
- . *Camera Con Vista*. Milano: Arnoldo Mondadori Editore S.p.A., 1986. Trans. of *A Room with a View* by Forster.
- Gissing, George. *By the Ionian Sea: Notes of a Ramble in Southern Italy*. 1901; Oxford: Signal Books, 2004.
- James, Henry. *Italian Hours*. 1908; Penguin Classics, 1995.
- Lawrence, D.H. *England, My England and Other Stories*. Cambridge: Cambridge UP, 1990.
- Anon. *Cosmopolis: An International Monthly Review*. London: 1896-98.; 復刻版, 紀伊国屋書店, 1999.
- フォースター, E.M. 藤村公輝・日夏隆 訳「永遠の瞬間」, 『E.M. フォースター短編集 集(Ⅰ)』, 近代文藝社, 1993 年.
- . 小池滋 訳『天国行きの乗り合い馬車 短編集Ⅰ』(E.M. フォースター著作集5), みすず書房, 1996.
- . 西崎憲 訳『眺めのいい部屋』, 筑摩書房, 2001.

参考文献：

- Belli, Mario Ferruccio. *The History of Cortina d'Ampezzo*. Dolomi. Org. 31 March 2006. <<http://www.dolomiti.org/dengl/Cortina/csto/mfbelli/cap15.html>>
- Bridges, Roy. 'Exploration and Travel outside Europe (1720-1914)'. Peter Hulme and Tim Young, eds, *The Cambridge Companion to Travel Writing*. California UP, 2002.
- Buzard, James. *The Beaten Track: European Tourism, Literature and Ways to 'Culture' 1800-1918*. Oxford: Clarendon Press, 1993.
- Colls, Robert. *Identity of England*. Oxford: Oxford U.P., 2002.
- Dilke, Charles. *Greater Britain: A Record of Travel in English-Speaking Countries during 1886 and 1867*. London: Cosimo, 2005.
- Inglis, Fred. *The Delicious History of Holiday*. New York: Routledge, 2000.
- Kemp, Sandra; Mitchell, Charlotte; Trotter, David eds. *The Oxford Companion to Edwardian Fiction*. Oxford: OUP, 1997.
- Moretti, Franco. *Atlas of the European Novel 1800-1900*. Turin: 1997; London, New York: Verso, 1998.
- Pemle, John. *The Mediterranean Passion: Victorians and Edwardians in the South*.

- Oxford: Clarendon Press, 1987.
- Strachey, Lytton. 'Carlyle', *Portraits in Miniature and Other Essays*. London: Chatto & Windus, 1931.
- Tambling, Jeremy. ed. *New Casebooks: E.M.Forster*. London: Macmillan, 1995.
- Trotter, David. *The English Novel in History 1895-1920*. New York: Routledge, 1993; rept. 2004.
- Urry, John. *The Tourist Gaze: Leisure and Travel in Contemporary Societies*. London: Sage, 1990.
- 石塚裕子, 『ヴィクトリアンの地中海』, 開文社, 2004.
- キング, フランシス. 辻井忠男 訳『E.M. フォースター評伝』, みすず書房, 1995.
- クラーク, ピーター. 西沢保 他訳『イギリス現代史 1900-2000』, 名古屋大学出版会, 2004 年.
- コリー, リンダ. 川北稔 監訳『イギリス国民の誕生』, 名古屋大学出版会, 2000 年.
- 津久井良充 編著, 『記憶のなかの場所』, 鷹書房弓プレス, 2000 年.
- 橋本楨矩・高橋和久 編著, 『ラドヤード・キプリング—作品と批評』, 松柏社, 2003.
- 久守和子 他編著, 『旅するイギリス小説』, ミネルヴァ書房, 2000 年.
- ベンプル, ジョン. 秋田淳子・加藤めぐみ・渡辺佳余子 訳『地中海への情熱——南欧のヴィクトリア=エドワード朝のひとびと』, 国文社, 1997.